

図書館の宝物から(その一)

シャーロット・デフォレストの楽譜

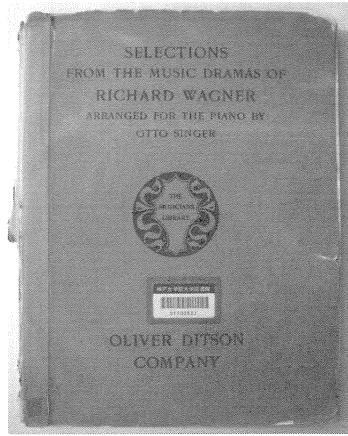
『ヴァーグナー楽劇選集』(ピアノ独奏用編曲版)

津 上 智 実

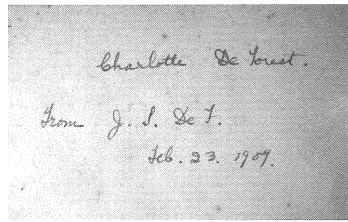
神戸女学院大学の図書館には貴重な資料が多いが、その中には意外なものも含まれている。今では宝物といつてよいものが、何気なく開架に並んでいてびつくりすることがある。そんな「図書館の宝物」を紹介してみたい。

まず紹介したいのは、音楽図書室所蔵の一冊の楽譜である。タイトルは『オットー・シンガーによってピアノ独奏用に編曲されたリヒャルト・ヴァーグナーの楽劇選集 *Selections from the Music Dramas of Richard Wagner arranged for the Piano by Otto Singer*』(以後『ヴァーグナー楽劇選集』と略記)。ボストンのオリヴァー・デイトソン社(Oliver Disson Company)から出版された「音楽家蔵書(The Musicians Library)」シリーズの一冊で、出版年は記載がないが、「版權一九〇五年(Copyright 1905, by Oliver Disson Company)」とあるので、恐らく一九〇五年の出版と考えられる(請求番号: 78641/WA1A)(写真1)。

とはいえ、ヴァーグナーの編曲物の楽譜は世に多い。CDやレコードがなかった時代、オペラやオーケストラ曲は



(写真1)



(写真2)

好んでピアノ用に編曲された。録音や放送が利用できるようになるまで、自分(たち)で弾く他なかつたからである。本学の音楽図書室にもヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版(Klavierauszug)は多数所蔵されている<sup>①</sup>。

その中で、なぜこの『ヴァーグナー楽劇選集』が宝物かと言えば、神戸女学院第五代院長(在任一九一五—一九四〇)として知ら

れるシャーロット デフォレスト(一八七九—一九七三)の楽譜だったからである。それを示すのは、表紙と扉との間の遊び紙にある書き込みで、そこにはペン書きで「Charlotte De Forest/ from J. S. De F./ Feb. 23. 1909」(写真2)とある。デフォレストは一八七九年二月二十三日の生まれなので、この日付はデフォレストの三〇歳の誕生日に当たる。では、贈り主の「J. S. De F」とは誰だろうか？

デフォレストの家族は、下記のように両親と五人兄弟の計七名である。<sup>②</sup>

父 .. ジョン ハイド デフォレスト John K. Hyde De Forest(一八四四—一九一一)  
母 .. サラ エリザベス デフォレスト Sarah Elizabeth [Starr] De Forest(一八四五—一九一五)  
姉 .. サラ リディア デフォレスト ペタス Sarah Lydia [De Forest] Pettus(一八七七一—一九五〇以降?)  
本人 .. シャーロット バージス デフォレスト Charlotte Burjis De Forest(一八七九—一九七三)

妹 … エリザベス レイ デフォレスト Elizabeth Lay De Forest (一八八一・四・二九—一八八二・九・一一)  
弟 … ジョン スター デフォレスト John Starr De Forest (一八八二—一九三五)  
妹 … ルイーズ ハイド デフォレスト ヴェリアーヌ Louise Hyde De Forest Veryard (一八八五—一九五〇以降?)

この中「J. S. De F.」に当て嵌まるのは、弟のジョン スター デフォレスト John Starr De Forest (一八八二—一九三五)である。したがって、この楽譜はデフォレストの三〇歳の誕生日プレゼントとして、当時二七歳の弟ジョンから贈られたものと理解される。<sup>③</sup>

当時、デフォレストは神戸女学院に赴任して三年目、英語と聖書が専門の若い宣教師で、日曜学校とさらに音楽も担当していた。本学音楽部を創設したエリザベス タレー Elizabeth Torrey (一八四八—一九二二) (在職一八九六—一九〇九)が目を痛めて一九〇九年春に離任した後は、音楽部の主任をも務めることとなった。

なお、父ジョン デフォレストは宣教師として一八八六年から一九一一年まで仙台にあったが、一九〇七年から一九〇八年の間は休暇を得て米国に帰っていたので、当時アメリカにいた弟ジョンから、この姉へのプレゼントを預かって日本へ持ち帰ってきたという可能性も考えられる。<sup>⑦</sup>

この楽譜がとりわけ興味深いのは、ペン書きで歌詞が書き込まれていることである。ピアノ編曲譜の二段譜表の上段と下段との間に英語で、下段譜表の下にドイツ語で歌詞が書き込まれている(写真3)。デフォレストは《夕星の歌》として知られる《タンホイザー》のヴォルフラムのロマンスなどをピアノで弾きながら、ある時は英語で、ある時はドイツ語で口ずさんで楽しんでいたのではないかと想像される。歌詞の書き込みがあるのは次の二曲である。



(写真 3)

ある。スクエアピアノの演奏会は年一回のペースで続けているが、二〇〇九年度は「一〇〇年前のレッスン曲」と題して、神戸女学院音楽部の初期卒業生であるピアノリスト小倉末子（一八九一—一九四四）<sup>⑨</sup>が音楽教師タレーとデフォレストのレッスンで勉強した曲を再現することを目指した。本学には手書きのレッスン帳が一冊残されており、最初期の音楽部で誰に、どの曲を勉強させたかが記されている<sup>⑩</sup>。その中から、この演奏会のために各種楽譜を探す中で最も難

1 March from *Tannhäuser*  
(Entrance of the guests into the Wartburg), pp.14–19<sup>⑧</sup>  
11 Wolfram's Romance, "O thou sublime, sweet evening star" from *Tannhäuser*, pp.20–23  
ところで、私がこの楽譜に出会ったのは偶然ではない。きっかけは二〇〇九年度前期の授業「初期神戸女学院」でスクエアピアノの演奏会をするために楽譜を探したことに

しなかったのがヴァーグナーの編曲物だった。楽曲の同定は、作曲者名、曲名、作品番号、調性などを手掛かりに行なうが、編曲物の場合、誰の編曲によるどの版を使ったのかを同定するのは(多くの場合記載がないため)非常に困難である。特に有名なオペラのアリアの場合には、多種多様な編曲譜があつて、一体どれを使ったのか全く分からない。やむを得ず、本学にあるヴァーグナーの編曲物の楽譜を片っ端から見えていったが、どれも収録曲や曲名表記に食い違いがあつて、これという楽譜に出会うことができなかった。結局、二〇〇九年七月一日の「スクエアピアノの演奏会」では、ヴァーグナーの曲は含めずに、シヨパン、シューマン、ベートーヴェンなどの作品を演奏した<sup>⑪</sup>。

ところが、この演奏会の直前になって、音楽図書室に古いヴァーグナーの楽譜があることが分かった。OPACには入っておらず、図書カードのみで検索可能な古い資料群があることを図書館員のお一人から教示された。ヴァーグナーの編曲物は二冊あったが、その中でレッシン帳に記載された四曲と収録曲がびったり一致したのが、この『ヴァーグナー楽劇選集』だった。しかも、当時指導に当たっていたシャーロット デフォレストの名前が書き込まれている。半年探し続けた楽譜に出会った瞬間だった。

一九〇九年秋学期の小倉末子のレッシン曲には、ヴァーグナーの編曲物が四曲含まれている。手書きのレッシン帳から、その部分を書き抜いてみよう。

#### Fall Term 1909

- 1) Wagner: Song to the Evening Star (mem.) [*Tannhäuser*, III]
- 2) : Prelude to Lohengrin
- 3) Elsas's Dream [*Lohengrin*, I]

4) Walter's Prize Song [Meistersinger, III]

この内、最初の《タンホイザー》の〈夕星の歌〉は「暗譜した(mem. = memorized)」と記されているので、舞台で演奏した可能性が考えられる。そこで、神戸女学院同窓会誌『めぐみ』を調べてみたところ、一九〇九年十一月二十三日午後七時からの「秋季大文学会」において「小倉すえ、永松貞」が「ピアノ、オルガン連奏」で「Song to the Evening Star - Wagner」を講堂で演奏したことが分かった。<sup>⑬</sup>

以上から、神戸女学院大学音楽図書所蔵の『ヴァーグナー楽劇選集』（ボストン、一九〇五年は、一九〇九年二月二十三日のシャロット デフォレスト三〇歳の誕生日に当たって、弟のジョン スター デフォレストよりプレゼントされた楽譜であり、そこにデフォレストは歌詞を書き込んで、自分で弾き語りをしたと想像される。<sup>⑭</sup>）その上で、一九〇九年秋学期に音楽部の生徒、小倉末子ならびに永松貞のレッスン曲として教育に活用し、その成果発表として、一九〇九年十一月二十三日の秋季大文学会に講堂のステージで演奏するよう導いたものと理解される。<sup>⑮</sup>

かくして、この楽譜は一〇〇年前の家族の絆と、本学における教育実践とを証する貴重な資料であり、神戸女学院の宝と呼ぶにふさわしいものであろう。

註

- ① 本学図書館のOPACで「作曲者：Wagner」「キーワード：Klavierauszug」と入力して検索すると二五点の楽譜が列挙される。
- ② デフォレストの家族については、竹中正夫『C・B・デフォレストの生涯』（創元社、二〇〇三）にも詳しい記述がなかったため、今回、同志社女子大学史料室、同志社社史資料センター、米国イエール大学神学部図書室(Yale Divinity School Library)・

神戸女学院史料室の協力を得て、これら七人のフルネームと生没年を知ることができた。記して感謝する。姉サラと妹ルイーゼの没年は未詳だが、二人とも長寿であったことが、シャールロットと三人で撮った晩年の写真(竹中前掲書、一二二ページに掲載、撮影は一九五〇年以降かと思われる)から窺われる。

③ 父(John)と母(Sarah)からの贈物という可能性も考えたが、その場合には「J.&S.De F.」と書く方が普通であろう。イエール大学神学部図書所蔵の史料によれば、そもそも弟の名(John Starr)は父(John)と母(Starr)に由来するという。

④ デフォレストは一九〇五年にも本学で教えているが、一九〇六年には鳥取で研修を行ない、一九〇七年から本学に落ち着いた。タレーの離任について、竹中前掲書には一九一〇年とあるが(四六ページ)、『めぐみ』第四九卷(一九〇九年十二月二十日発行)によれば一九〇九年六月のことである。同巻二九ページに「六月八日、長年本校の音楽教師なりしミスターレイは四月上旬歸國の途に上らるべき處「病」氣の爲音楽館にて養生され居たりしがいよいよ今朝九時の列車にて神戸を出發せられ、全校教師生徒一同三ノ宮ステーションに見送たり、同氏はシベリヤ鐵道にて独逸まで赴かれ同所の音楽を視察せらるる積りのよし」とある。

⑥ 竹中前掲書、二七ページ。

⑦ 宣教師の故人略歴帳である *Vinton Book*, vol.1, pp.84-85 によれば、父ジョン デフォレストと母サラ デフォレストは共に一九〇七年五月二十日にボストンに到着し、翌一九〇八年九月二十五日にサンフランシスコから日本に向けて出航している。

⑧ この曲の場合には、下段譜表下に英語とドイツ語の歌詞が並記され、ドイツ語の方は三段目で終って後は英語のみとなるので、基本的には英語で歌っていた可能性が高いと思われる。

⑨ 一九一〇年三月三十日に本学音楽部普通科を卒業し、神戸女学院(一八七五年創設)第二七回卒業生、音楽部(一九〇六年設立)第四期生に当たる。小倉末子については、津上智実「読売新聞に見るピアノリスト小倉末子(一八九一―一九四四)」、『神戸女学院大学論集』第五五卷第二号(二〇〇八年十二月)五三一―六八頁、同「旅するピアノリスト―小倉末子の朝鮮演奏旅行」、『神戸女学院大学女性学評論』第二三号(二〇〇九年三月)六六―九一頁を参照。

⑩ 明治期の音楽教育の実態を示す貴重な史料である。これについては稿を改めて書く。

⑪ スクエア ピアノ演奏会「一〇〇年前のレッスン曲」(日時:二〇〇九年七月一日(水)一六時四〇分―一八時一〇分、場所:神戸女学院大学図書館本館ロビー、演奏:神戸女学院大学大学院音楽研究科一年生、金岡伶奈、桑田みどり、三田村麻美、小原友、田村徳子、峠舞衣子)での主な演奏曲目は以下の通り。バルティニー(練習曲) 作品二九の一(一九〇八年春学期、タレー先

生指導)、ゴットシャルク(最後の希望)(一八五四)(一九〇八年春学期、タレー先生指導)、シューマン(ロマンズ)作品二八の二(一八三九)(一九〇九年春学期、デフォレスト先生指導)、グリーグ(詩的な音の絵)作品三の二(一八六三)(一九一〇年秋学期、デフォレスト先生指導)、レシエティツキー(左手のためのドニゼッティ)(ランメルモールのルチア六重唱)(一九一〇年秋学期、デフォレスト先生指導)、ベートーヴェン(ソナタ)作品二七の二「月光」第一章(一九一一年冬学期、デフォレスト先生指導)、ショパン(バラード)第二番(一八三九)(一九一一年冬学期、デフォレスト先生指導)他。この内、シューマンとショパン、ベートーヴェン以外の楽譜は本学に見当たらず、大半は海外から取り寄せた。なお、この復元演奏会については、読売新聞(二〇〇九年七月二日)、神戸新聞(二〇〇九年七月二日)、朝日新聞(二〇〇九年七月二十一日)の三紙で報道された。

⑫ ご本人は「図書館員として当然のことをしただけです」と固辞されたので、本文中ではお名前を挙げることを控えるが、久富優子さんに御礼申し上げます。

⑬ 「十一月二十三日午後七時より講堂に於て秋季大文學會を開く會集者堂にあふれ非常なる盛會なりき。執行順序、第一部、1. オルガン独奏 Grand March-Mendelssohn、永松貞……7. ピアノ独奏 Andante in F-Beethoven、小倉すえ……第二部、1. ピアノ、オルガン連奏 Song to the Evening Star-Wagner、小倉すえ、永松貞……」。『めぐみ』第四九号(明治四十二年、十二月二十日)四五ページ。

⑭ イエール大学神学部図書室(Yale Divinity School Library)所蔵のシャーロット デフォレスト文書(Charlotte DeForest Papers, Record Group No. 178) (<http://hdl.handle.net/10079/fa/divinity.178>)を二〇一〇年一月十一日に閲覧する機会を得た。その中に残された三冊の手帳の内の一つは、一九〇三年十二月五日から一九一一年五月八日までの日記の抜き書きのように見えて興味深い。一九〇九年二月九日には「ヴァーグナーの夕べ、女学院にて十五俱樂部、コップ嬢の助演で(Wagner Evening, XV Club at the College. Ms. Cobb assisting)」との書き込みがあり、すでに二月九日に(二十三日の誕生日に先立って)ヴァーグナーの楽劇をピアノ伴奏と歌で演奏した可能性も考えられる。「十五俱樂部(XV Club)」の実態については現時点では不明である。ご存じの方は、ご教示頂ければありがたい。

⑮ 二〇一〇年七月一日(木)のスクエアピアノ演奏会では、このヴァーグナーの曲を取り上げた。

(音楽学部教授)